

# “農と食” 北の大地から

連載第36回

「農」の世界を発展させる  
“WOOOFする”人たち

ルポライター  
滝川 康治



## 旅をしながら田舎暮らしを体感 静かに広がる労働と交流の輪

積丹町の高野健治さん中央宅で夕食を摂るスイス人の若者（左は「グッドタイムを送っている」と田舎暮らしを楽しんでいる。左下は活動を紹介した単行本「泥だらけのスローライフ」(WOOOF日本、星野紀代子、星野紀代子、クレン・パインズ著、実業之日本社)

“農と食”北の大地から③

彼は、大学で金融を学んで銀行に勤め、ウーファー(WOOOF)体験をする働き手のことになる前は新聞社で印刷の仕事をしてた。東京で二カ月前からした経験もあるが、「忙しく働いているクレージーなところ。都会というよりも地獄だね」ときつぱり。田舎で自給自足的な暮らしをしながら、いろんな人が集える環境を創ることが夢だ。スイスには、職業としての農家を選ばなくても、そうした農的志向をい

若者が多いという。

### 外国人の働き手に人気 ホスト農場で心の交流

ホスト(受け入れ先の)高野さんは小樽出身。大学を卒業してからヨーロッパや中近東を旅した経験があり、イスラエルの共同集団農場「キブツ」で生活した三年間が農業に関心をもつきっかけだった。八〇年代初めに積丹に新規

国内外から訪れる人たちが有機農場などで1日6時間働く代わりに、農場側が食事と宿泊場所を無償で提供する「WOOOF」の取りくみが、ここ北海道でも静かな広がりを見せている。後志管内積丹町と上川管内中富良野町の受け入れ農場や札幌市内にある事務局を訪れて話を聞き、この活動の可能性を考えてみた。

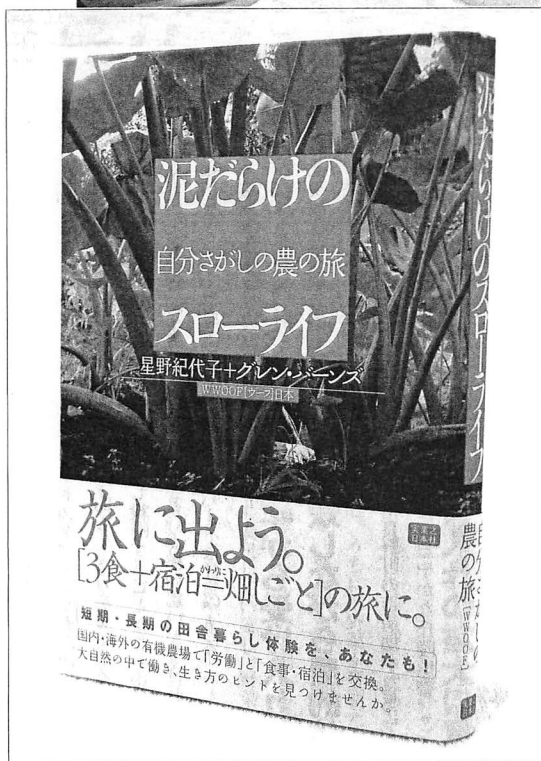
### 無償で働き食事と宿泊場所の提供を受ける

七月中旬のある日、積丹町内で有機農業を続ける高野健治さん(1949年生まれ)のお宅を一年数カ月ぶりで訪れたわたしは、旅をしながら農場で働くスイス人の若者に会っていた。「ここは、すごくユニークなところ。ボス(高野さん)のことはとてもインタレストイキングな(おもしろい)人で、グッドタイムを送っていますよ」  
六月中旬から二カ月前ほど滞在し、屋根裏で蛇がうごめく音が聞こえる改造倉庫の一室で寝泊まりしながら、自転

車で五分ほどかけて農場に通う、ジュリアン・ソントレガーさん(80年生まれ)は、楽しそうにこう話す。すでに、野菜類の間引きや除草、草刈り、緑肥作物の種まきなどを体験した。

一日六時間働く代わりに、農場側が食事と宿泊場所を無償で提供する——というのがウーフ(Willing Workers On Organic Farm)有機農場で働きたい人たち。以下、「WOOOF」と表記の仕組みである。労賃は出ない。

朝九時に「出勤」し、農作業を終える食事や入浴、日本語の勉強などをして、夜十時ころまで高野さん一家と過ごす。休みの日には散策や登山、サイクリングなどを楽しんでいる。



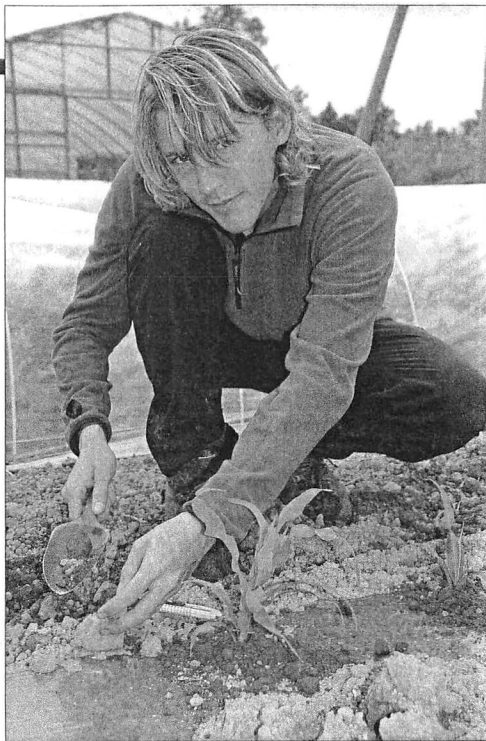
入植した、この分野では草分けの人物。研修生の受け入れにも熱心で、ここを巣立ち全道各地で活躍中の新規就農者をわたしは何人か知っている。

「日本の女の子がオーストラリアでウーファーをやっている」というテレビ番組を見て興味があわいた。事務局が札幌にあると知って訪問し、昨年夏場の受け入れを開始。すでに十数人がWOOOF体験をした。「日本語をしゃべらなくてもOK」と告知したこともあ

り、外国からのウーファーが多い。「俺もキブツでウーファーをやっていたようなもんだ。いい勉強になったし、いろんな人と出会えた。それで、自分もやってみよう、と。うちは人気のある農場になつていっているらしいよ。「ポロ家だけど、うまい酒を飲ませる」と紹介しているの、肩肘張らないのがいいんじゃないかな(高野さん)

夕食時、ジュリアンさんは食器を取り出し、みんなのご飯をよそう。食事

をしながら、彼の家族のことが話題にのぼる。日本でのWWOOF体験はここが初めて、スイスと気候が似ている北海道を訪問したかったとか。音楽好きなので、ミュージシャンでもある高野さんとは馬が合うようだ。  
二女の愛夢さん83年生まれは数年前、父親がいたキブツで半年間暮らしを経験もあり、英語が達者である。食後のひととき、白熱灯がともし静かな音楽が流れるなか、彼との間で神や運命についての話が熱を帯びる―そこには、労働報酬や農業技術の習得を通



スイートコーンの間引きをするジュリアン・ゾンダレガーさん

じてつながるのとは一味ちがう、人間同士の交流のなかで農的な暮らしにふれられる世界があった。

### 食や農への意識も変化 ここ数年で会員が急増

70年代にイギリスで始まり、いまでは五十カ国近い国に広まったWWOOFとは、お金のやり取りなしに「食事・宿泊場所」と「労働力」を交換するシステムのこと。ホストは、無・減農薬、無化学肥料で作物を栽培する農場や牧場

を核にして、環境活動をやっている施設、教育機関、福祉施設、自然食品店、農家民宿、ペンションなどと幅広い。ウーファー(働き手)のほうは、十六歳以上の働ける人であれば、年齢や国籍、性別を問わず誰でもなれる(注1)1年間の登録会員制。年会費はホスト6500円、働き手4000円)。単なる交換システムにとどまらず、さまざまな知識や文化、心の交流を図ることを活動の目的にしている。  
日本事務局は九四年、星野紀代子さん(63年、清水町生まれ)、グレン・バーンズさん(59年、オーストラリア生まれ)夫婦が札幌市内に開設した。三年前にインターネットを導入したところ会員数が急増し、七月現在のホスト数は百四十五件、ウーファーは千五百人ほど。それでも経費がかかるのでWWOOFだけで生活するのは難しく、事務局の星野さん夫婦は英会話教室を営みながら活動を続けてきた。

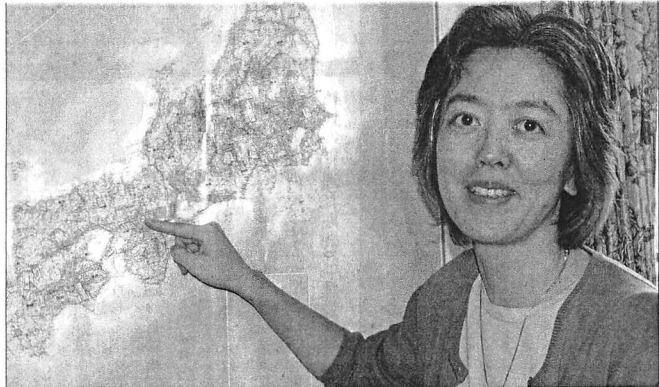
ホストは五十代が中核で、北海道では道央部を中心に二十六件が登録している。ウーファーのほうは、日本人と外国人の割合が半々。日本人の場合、定年後の生活を模索する中高年も含め

て男性が四割、六割を占める女性のほうは圧倒的に若い人が多いという。「登録数の増加は」食や生き方に対する意識がここ四五年、大きく変わってきたんだと思いますね。若者のなかに、「農業や農村に住むのがカッコいい、おもしろい生き方だな」という人が多くなっている。農家レストランなど「農業十」のところが自然体験の催しをするホストも増えています」と手応えを感じている星野さん。  
メールによる問い合わせだけで二百〜三百件もあり、これを三人のパートスタッフとともに切り盛りする。「農的な生き方をしてる人たちの橋渡し役をすることがやり甲斐」星野さんという熱い思いがなければできない、ハードな仕事である。

### 今年から受け入れ開始 自炊しながら農的体験

中富良野町の市街地から東に七キロほどのゆるやかな丘陵地帯。ここで、ベリー類や米、野菜などを作りながら、養鶏や農家民宿&カフェをやっている「どこか農場」の主、武田守弘さん(51

年、愛知生まれ)は、今春からウーファアの受け入れを始めた。取材に訪れたときは、六月からここで働き始めた八木橋利代子さん(62年、埼玉生まれ)が片言の英語で、数日前にカナダからやってきたカーメン・シンさん(80年生まれ)に宿泊客の受け入れについて教えているところだった。



事務局を切り盛りする星野さんは「橋渡し役にやり甲斐を感じる」と話す

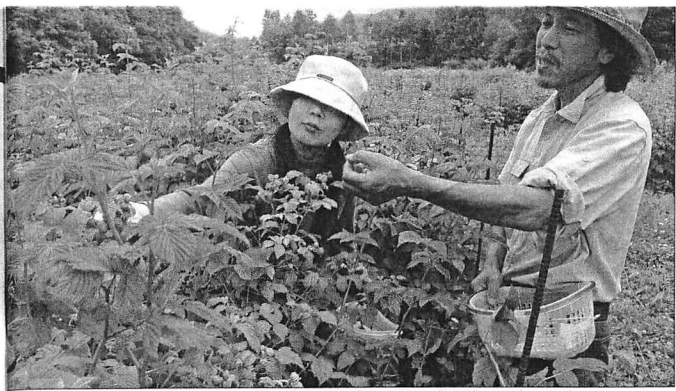


「WWOOFはお金がかからないのが一番いいところ」と言う高野さん

中部日本放送でラジオのディレクターなどの仕事をやっていた武田さんは十三年前、売りに出ていた三・五haほどの離農跡地を購入し、この地に新規入植した。妻と死別して一人娘との生活になり、自然のなかで子育てをしよう、と考えて移り住んだという。入植してまもなく、野菜の直売所を試みるとお客さんがけっこうやってきた。そこから、ジャムづくりや民宿&カフェなどに発展し、「農家十サービス業十農産加工」と、いくつもの仕事に手を広げるようになった。民宿に隣接

した川べりで、キイチゴやカリンズ、グスベリ、カシス(黒すぐり)、ハスカップなどを栽培する見事なベリー園は一ヘクタールほどの面積があり、道内では最大規模のものだろう。  
どこの農家も働き手の確保には苦労しているが、武田さんのような営農形態だとなおのこと人手がいる。これが、なかなか大変である。  
そんななかで昨年、事務局の星野さんがホストの登録を薦めている、という話を知己の農家から聞いた。興味をもった武田さんはすぐに登録したが、初年度は反応がなかった。  
今年、すでに六人のウーファーが民宿&カフェの仕事や除草、ベリー摘みなどを体験。これから訪れる人もおり、年間十人ほど受け入れる。  
「どこか農場」には、作業の手伝いや一人旅で訪れる女性のために宿泊施設がある。「力仕事や農作業に男手がほしいんですが、施設が整っていないので、女性ウーファーのみ受け入れていきます」(武田さん)。食事については、当初やってきたカナダ人に三食提供して疲れたので星野さんと相談し、すべて自炊し

てもらっている。  
「ウーファーにはホントに助かっていますね。うちには野菜が豊富だし、米も作っている。放し飼いの養鶏の仲間から産卵をもらえるので肉もある。彼女たちも満足しているし、野菜を作った料理して食べるのが目的の人には言うことないんじゃないですか」  
と武田さんはうれしそうに話す。田舎暮らしだと交流範囲は地元に限られるが、その点でも刺激になる。  
「お客さんと宿主との付き合いはあるけれど、ウーファーの場合は食生活や生活習慣を含めて交流が深まる。最初はうつとういけれど、それを上回る楽しさがありますね。もっと窓口を広げて、来年は常時四人くらい受け入れてもいい。僕のほうは農業に力を入れていきたいですね(武田さん)」  
東京の自然食レストランで十年ほど働いた経験がある八木橋さんは、ここに来る前に秋田の農家民宿WWOOFのホストを再建する仕事を半年ほど手伝っていた。ホストの補佐役だっ



1haの広さがあるベリー園を訪れた観光客に摘み方を教える武田守弘さん

たが、そこで働くウーファーと知り合  
い、みずからW O O Fに登録した。  
「レストランの調理場で有機野菜を洗っ  
ていて、『この野菜はどうして出来たの  
かな?』と言いながら働いていました。  
野菜づくりの現場が知りたかったし、  
秋田では自分の未熟さに気づいて、も  
っと鍛えてみようと思ったんです。初  
めての北海道ですが、ここは居心地が  
いいので滞在期間の延長、延長でき

ています(八木橋さん)  
と、中富良野の生活がすっかり気にな  
っているようだ。

## 人と接する姿勢が大事 トラブル回避の知恵も

取材に訪れた農場は、いずれも新規  
入植した人がホストになっており、就  
農に至るまでのさまざまな社会体験が  
ウーファーと交流するときに生きてい  
る。話を聞き、単なる労働力として受  
け入れていないことがよく理解できた。  
「農に関わる人なら誰でもホストにな  
れるわけではないのである。

この点について高野さんは、「人と接  
することが苦にならない農家でないど、  
ウーファーを受け入れられないんじや  
ないかな。安い労働力が目当てでやっ  
ても楽しくないと思う。俺は有機農業  
の仲間」「国際親善のつもりで働いて  
もらわないと上手くいかないよ」と言  
っているんだと説明する。

武田さんも、「農業の専門的な研修を  
すると、W O O Fのやり方は違う。  
食べものに関心がある人が圧倒的なの  
で、農業をどんどん撤くような農場は



「どこか農場」でW O O F体験中の八木橋利代さん(左)とカーメン・シンさん

ダメでしょうね」と話す。  
初めて出会う人間同士だから、なか  
にはトラブルが起こることもあるはず。  
そんな事態を防ぐためにどうしている  
のだろうか。星野さんに聞くと、

という答えが返った。ホスト用に十  
九項目にわたる規約も定めている。外  
国にお手本があるものの、試行錯誤を  
くり返して削り上げたシステムだとい  
うことがよく伝わってきた。

## 創意工夫で広がる可能性 若者たちに明日への希望

「(双方の)相性が合わないケースもあ  
ります。事務局が取りもって対応しま  
すが、当初考えたよりも問題は少なく  
けつこうスムーズになっている。双方が  
登録申し込みをするときの文書に働く  
目的や緊急連絡先など三十数項目にわ  
たつて記載してもらい、ウーファーには  
会員証の提示も求めますが、がんじが  
らめにせず、あくまで対等な立場でや  
れるようにしています」

ホストやウーファーとの連絡調整、  
メールやF A Xによる問い合わせへの  
対応、各地の農場訪問...と忙しい毎日  
を送る星野さんは、双方の橋渡し役を  
する喜びを感じている、と語る。  
「登録した若者を見ると、『捨てた

もんじやないな」という気がしますね。  
ホストやウーファーから「受け入れてよ  
かった」「自分の生き方が見つかった」と  
フィードバックがあったとき、やっていて  
よかったと思います。自転車やバイク  
で旅をしながらウーファーをやっている  
人たちから、「将来はW O O Fのホ  
ストになるのが夢」という声を聞くの  
が最高ですね。わたしたちが種をまき、  
それが生長していくのが喜びなんで  
す」(星野さん)

ホスト数が百件を超え、次なる目標  
はそれを五百件まで増やすことだとい  
う。芯の強い人だな、と思う。

種丹の高野さんが、こう話す。  
「このシステムはお金が絡んでいないの  
が一番いいところ。うちにやってきた  
外国人ウーファーは日本や日本文化に  
興味を持っていく人が多く、いままで  
受け入れた実習生とは意識が違う。日  
本人だって、すぐに農業をやりたい」  
と言う人は少ないわけで、W O O F  
の経験が何かのきっかけになればいい  
んじゃないか」

中富良野の武田さんは、これからの  
可能性について、こう提言する。

「僕の話聞いた上富良野町の農家が

最近、ホストに登録しました。W O O  
Fをまだ知らない有機農家に働きか  
けたり、慣行栽培の農家でも新しい分  
野をめざしている人、小家畜を飼いな  
がら家族経営をやっている農家を狙っ  
ていけば、もっと発展していけるんじ  
やないか。うまくやれば自然に浸透し  
ていけるし、展望があると思います」  
片田舎で暮らすわたしは、農村には  
見知らぬ人間と接するのが苦手な人が  
多いことがよくわかる。人手不足を解  
消するための窮余の一策として、中国  
人研修生という名の労働力を求める  
町も増えている。人手を確保すること  
をあきらめ、大型機械を導入して借金  
を膨らませる農家も多い。

そんな農村のなかで静かに広がるW  
O O Fの試みは、人間同士が交流し  
あうことで「農」の世界のおもしろさを  
体感できる、明日への希望を感じさせ  
る取りくみといえるだろう。

### ■W O O F日本事務局

札幌市東区本町2条3丁目6-7

011-780-4908

http://www.woofjapan.com

info@woofjapan.com